

2019年 3月 25日
私たちの古河ストーリー



古河はかく語りき

～私たちの古河の〈痛み〉と〈希望〉の物語～

石原真衣

2019年3月、古河記念講堂の歴史的一幕が下りようとしている。

フランス・ルネサンス風の建物の各部には、華麗な意匠が見られ、新緑が美しい季節にあっても、白銀の世界の中でも、キャンパスの景観における古河記念講堂はとても美しく、観光客が足を止めカメラを向ける場所でもある。サッポロ市のガイドブックには、しばしば古河記念講堂が掲載され、観光資源としての機能も果たしている。

古河記念講堂の美しさの価値は、現代だからこそ益々高まっているともいえるだろう。ポスト大量消費社会が推奨される今、すでに失われた時代へのノスタルジーを喚起させ、労力と資金を費やした古河記念講堂は、現代を生きる私たちには、眩しく輝いている。古河記念講堂に研究室を置く歴史文化論講座は、歴史学と文化人類学の教員・学生が学際的な研究を志す場であった。歴史学が扱う「歴史」と、文化人類学が扱う「現在」を架橋するエージェンシーを、古河記念講堂は発揮してきた。「私たちの古河」は、いつも、学問を生み出す雰囲気をもとに、学問の薫りを醸し、わたしたちを見守ってきた。

古河記念講堂建設の主人公は、古河財閥である。現在の北海道大学の前身である札幌農学校は、明治初期に開校した。その後、1907年に東北帝国大学が仙台に設立され、その一分科大学として、札幌農学校は、東北帝国大学農科大学に改組された。農学校が帝国大学に昇格した背景には、当時の総長佐藤昌介と同郷であり古河財閥の顧問を務めていた内務大臣原敬の存在がある。原は、足尾鉍毒事件について、当時、社会から批判を浴びていた古河財閥に対して、社会貢献のための出資を勧めた。このような経緯で、帝国大学創設費として寄付された資金によって、1909年、古河記念講堂は建築された。

美しい建築物としての古河の歴史には、日本初の公害と言われる、足尾鉍毒事件（あしおこうどくじけん）という現代人としての我々が抱える病の始まりがあった。足尾鉍毒事件または足尾銅山鉍毒事件とは、19世紀後半の明治時代初期から栃木県と群馬県の渡良瀬川周辺で起きた、銅山の開発により排煙、鉍毒ガス、鉍毒水などの有害物質が周辺環境に

著しい影響をもたらした公害事件である。

1890年代より栃木の政治家であった田中正造が中心となり国に問題提起するものの、加害者決定されず、群馬県毛里田地区の被害農民達が、1972年3月31日、古河鋳業株式会社（現：古河機械金属株式会社）を相手とし、総理府中央公害審査委員会（後の総理府公害等調整委員会）に提訴。2年後の1974年5月11日、調停を成立させた。足尾の精錬所は1980年代まで稼働し続け、2011年に発生した東北地方太平洋沖地震の影響で渡良瀬川下流から基準値を超える鉛が検出されるなど、21世紀となった現在でも影響が残っていると言われる。

古河の歴史の始まりには、急激に近代化を進めた日本の、文明を享受することによって生じる弊害があった。実際の加害者は、当時の古河工業株式会社であり、被害者はそこで暮らした人々や自然と、そこからつらなる現在を生きる人々である。しかし、近代国家の歩みと同時にもたらされた公害について考えるためには、加害の歴史を責める以上の視点が求められる。水俣病被害の当事者である緒方正人が示唆した、「人間と社会総体の本質」への眼差しはするどい。

言葉にすればたったの三文字の水俣病（みなまたびょう）に、人は恐れおののき、逃げ隠れし、狂わされて引き裂かれ、底知れぬ深い人間苦を味わうことになった。そこには、加害者と被害者のみならず、「人間とその社会総体の本質があますところなく暴露された」と考えている。つまり「人間とは何か」という存在の根本、その意味を問いとして突きつけてきたのである。

私自身、その問いに打ちのめされて85年に狂ったのである。それは、「責任主体としての人間が、チツソにも政治、行政、社会のどこにもない」ということであった。そこにあったのは、システムとしてのチツソ、政治行政、社会にすぎなかった。

それは更に転じて、「私という存在の理由、絶対的根拠のなさ」を暴露したのである。立場を入れ替えてみれば、私もまた欲望の価値構造の中で同じことをしたのではないか、というかつてない逆転の戦慄（せんりつ）に、私は奈落の底に突き落とされるような衝撃を覚え狂った。

一体この自分とは何者か。どこから来てどこへゆくのか、である。それまでの、加害者たちの責任を問う水俣病から自らの「人間の責任」が問われる水俣病へのどんでん返しが起きた。そのとき初めて、「私もまたもう一人のチツソであった」ことを自らに認めたのである。それは同時に、水俣病の怨念（おんねん）から解き放たれた瞬間でもあった。（緒方正人『チツソは私であった』より）

水俣病の人々がどのような人間苦を味わい、死んでいったのか、それまで言葉にならなかった痛みを、昨年他界した石牟礼道子は『苦海浄土』で著した。私ははじめてその本を

読んだとき、描かれる自然のあまりに美しい描写と、そこで描かれる、水俣病罹患者の、本当の、人間苦に接し、あまりの恐怖に、文字を読み進めることができなかった。そのような苦しみを味わう側である緒方正人が、「チツソは私であった」という言う時、加害と被害の確固たる実体はあやうさを露呈する。近代日本が生んだ様々な公害は、「誰」によってもたらされたのか。奪われ傷つけられる側の人間は、意識的、あるいは無意識的に、その文明の利を享受してはいなかったか。実際の被害があまりに壮絶である故に、問われることそのものが躊躇されるような「人間と社会総体の本質」を、緒方はとても簡潔に言語化した。「チツソは私であった」と。

私たち古河住民にとって、日々、日常を過ごす場であった古河は、私たちの脳と感受性が処理しきれずに、歴史と現在の中で立ち尽くし、全てが停止してしまうような圧倒的な力をもつ物語を携えている。古河の建設の直接的な契機であった足尾鉍毒事件に、まさに発生してから100年近くの年月が、「解決」と癒しに費やされた。あの時からさらに科学やテクノロジーは深化し、我々が生きる現在は、何が「公害」なのか、誰が加害者で被害者なのか、様々な側面がヴェールに包まれているような気さえする。日本初の公害事件と言われる足尾鉍毒事件は、そのような現在と、今終わろうとしている私たち古河住民が携わった物語の、生みの親だったのだ。

古河の歴史において、どうしても触れたいもう一つの物語は、古河講堂「旧標本庫」人骨問題である。

1995年7月26日、古河記念講堂の現101号室から、新聞紙に包まれ段ボールの中に入れられた頭骨6体が発見された。一つの頭骨に差し込まれていた文書には「東学党」に関係ある人物の首であり、1906年に「珍島」で採取されたと記されていた。他の三体には「オタスの杜」と記された紙片があった。「オタスの杜」は、日本統治下のサハリンで先住民を集めて居住させた土地の名である。これらの頭骨が調査・研究されたいらしい形跡はなく、文学部にはその存在はもとより、いかなる理由や目的で置かれていたのか知られていなかった（『古河講堂「旧標本庫」中間報告書』：1）。

報告書の冒頭には、下記の言葉が記されている。

人間の骨をこのような形で扱うことが許されるのであろうか。学問の世界では、現に生きている人間も、死者も、本質的には区別がない。人骨に限らず、一般に過去の人類の文化を研究する場合には、研究者は過去の人類との生き生きとした対話を行い、それによって過去から学ぶのである。人骨は単なる「もの」ではない。研究者にとってそれは生きている人間と同じであり、それが語りかけることに虚心に耳を傾けるのである。それを研究する学問の意義は、その人骨が属する文化を深く理解するとともに、さらにこのことを通

じて、人間の尊厳、命の尊さに対する認識を確かなものにするににある。

今回のような事実が存在したこと自体がまことに残念であり、教育者・研究者として信
じがたく・恥ずかしいことである。

(『古河講堂「旧標本庫」中間報告書』：1)

文学部は、事態を重く見て、人骨が発見された翌日の7月27日に古河講堂「旧標本庫」
人骨問題調査委員会を設置した。その際の方針は以下であった。1. 関係者はもとより報
道機関等に対しても頭骨を秘匿せず公開するが、人骨の尊厳と人骨に対する礼を失しない
よう配慮して、丁重に供養する、2. これらの頭骨がどのようにして古河講堂に収納され
るようになったか、その経緯を調査する、3. 関係者に返還するためにもっとも適切な方
法を検討する、4. 調査は平成7年度内、遅くとも一年以内(平成8年7月26日まで)に
完了する方向で進め、調査結果がまとまった段階で中間報告書あるいは報告書を公表する。

発見の翌日には、古河講堂「旧標本庫」人骨問題調査委員会が設置され、方針が決定さ
れ、具体的な調査の期間を設定するという事は、とても迅速な対応である。「オタスの杜」
と記された紙片と共に発見された遺骨は、ウイльтаの人々に返還された。その返還式に、
同行した津曲敏郎北海道大学文学部教授(現名誉教授)は当時の記憶を以下のように語る。

ロシア少数民族の言語に関する研究を行っていたので、調査委員に指名され、遺骨収集の
経緯や、現地での調査、返還に携わった。ウイльтаの人々は、長く経過した遺骨たちをど
のように弔うのか、どこに埋葬するのかなど、様々な課題がある中で、よく遺骨返還を受
け入れてくれたと思う。それまで自分は言語学者として研究を行ったが、どのような歴史
や社会の構造の中で研究が行われているかについて深く知らなかったのかもしれない。し
かし、古河人骨問題に関わることによって、少数民族が被った歴史と、学問の植民地主義
的な構造について考える契機となった。遺骨収集の経緯などに関する詳細は、明らかにな
らなかった点も多いが、北大にその遺骨たちがあったという事実は変わらない。その中で、
ウイльтаの人々が返還のときに、「北大はよくここまでやってくれた」と歓迎してくれたこ
とは、とてもありがたかった。ぜひ、この歴史を、古河で学んだ学生たちに、知ってほし
い。

(2019年3月5日筆者インタビュー)

古河人骨問題に関する経緯は、『古河講堂「旧標本庫」人骨問題 報告書』、『古河講堂「旧
標本庫」人骨問題 報告書Ⅱ』、『古河講堂「旧標本庫」人骨問題 報告書Ⅲ』、および『古
河講堂「旧標本庫」人骨問題 中間報告書』に詳しい。植民地主義的な過去に、研究機関
として正面から対峙する真摯な態度が表明される内容である。1995年7月26日に、突如
「当事者」となった北海道大学文学部が、当然内部に様々な意見や感情があったであろう

ことは予想できるが、しかし、できる限りの時間と労力と誠意をもって、学問の成り立ちそのものに向き合ったことは、今後あらためて評価されるべき、事例である。

古河人骨問題から、私たちは<痛み>と<希望>を学ぶ。1995年には、南アフリカ共和国、2008年には、カナダで、深刻な人権侵害について調査、公表するための真実と和解委員会が設立された。それぞれ、その時代の政治的背景などが委員会の設立に影響を及ぼしていると考えられるが、しかし、「他者」の痛みを社会総体で引き受け、新たな世界を拓くというプロセスは、それまで想像されなかった希望を生み出した。国家レベルでの、真実と和解委員会と、北海道大学文学部で行われた古河講堂「旧標本庫」人骨問題調査委員会では、実際の規模に違いはあるが、両者には見逃すことができない決定的に大切な産物がある。それは、痛みを知ること、豊かな未来への切符を手にするということである。

私たちは、痛みを知り、人間苦を受け続け、そして、生き続けて、生きていく。人類の歴史は、あらゆる色彩の痛みを生み出し、私たちは歩み続けてきた。時が経過しても、風化されない痛みもあるのかもしれない。文明や科学の進歩が最良であると志向された時代に、銅山開発が進められ、私たち人類はそして幸せになるはずだった。頭骨を研究することで、人類の歴史を明らかにし、私たちのルーツを知ること、私たち人類は満たされるはずだった。あのとき、ただそれが、大切なことであると優先された。

しかし、私たちは、その陰でどのような痛みが生まれたのかを、今、知っている。足尾銅山の開発によって、そこで暮らす人々が長い間苦しんだ。遺骨の収集によって、長い間経過してしまった骨たちにまつわる悲しい物語を、ウイルトアの人々は継承する痛みを引き受けた。あのとき、ただ良きこととして遂行された多くの出来事が、結果として人々の身体や心を損なった。この事実は、今を生きる私たちにも大切な問いを届けてくれる。私たちが、今、行っていることが、これから先、思いがけない痛みや、人間苦を生み出すのかもしれない、と。

痛みとは、色彩豊かである。喜びや楽しみは、ただ、強烈なあるいは穏やかな感情として過ぎ去っていく。しかし、痛みは、あらゆる問いを生み出し、認識や分類や時代や世界を変化させ、たくさんの物語を生み出していく。そのエネルギーが人やモノや様々な事象を巻き込むような大きさである場合、それは様々なものを変形させ、そして、希望を生み出していく。足尾鉍毒事件によって寄付された資金は、わたしたちの古河の建設の直接的な契機となり、そこで、たくさんの物語が、希望が、生み出されてきた。そして、古河人骨問題は、北海道大学文学部に、学問がもつ暴力性について、学びや気づきを与えた。奪った当事者である大学と、奪われた側であるウイルトアの人々の間に、あたたかい交流を生み出した。わたしたちは、この古河がみた物語から、悲しみや痛みが和解や希望や豊かさにつながることを、知るのである。痛みとは、人間苦とは、命をむしばむ程の圧倒的な力

を持つとともに、彩り豊かで、そして人間の豊かさの資源ともなるのだ。

私たちの美しい古河は、過ぎ去る時間と歴史の中で、そこにあり続け、そして長い時間の中で、痛みが、希望へとつながる様を見守ってきた。
それが、私たちの古河の物語だった。

参考文献

緒方正人

2001『チッソは私であった』、葦書房

北海道大学文学部古河講堂「旧標本庫」人骨問題調査委員会

1995『古河講堂「旧標本庫」中間報告書』

1997『古河講堂「旧標本庫」人骨問題報告書』

2004『古河講堂「旧標本庫」人骨問題報告書Ⅱ』

2010『古河講堂「旧標本庫」人骨問題報告書Ⅲ』

屋根から滑り落ちる雪

井上淳生

春の予感が、日毎に実感に変わる3月。
新しいことが始まる季節。
毎年この時期になるとうきうきする。

同時に、3月は何かが終わる季節でもある。

歴文（歴史文化論講座）がなくなると聞いた。
古河（古河講堂）が空（から）になるということも。

2010（平成22）年4月から2017（平成29）年1月末まで、私はこの古河でお世話になった。私には、社交ダンスの世界を文化人類学の言葉で描く、という目論見があった。いま考えると、何とも稚拙で、思いだけが先行した問題意識だったが、先生方は温かく迎え入れて下さった。

私が古河の「住人」となった当時の歴文には、講座主任の太田敬子先生はじめ、宮武公夫先生、桑山敬己先生、小田博志先生、権錫永先生、村田勝幸先生がいらっしやった。

どの先生も柔和な面持ちながら、学者として、教育者としての矜持が表ににじみ出ていた。私はここで頑張ろうと心に決めた。

108（火曜日午前の小田ゼミ、水曜日午前の桑山ゼミ）、109（火曜日午後の宮武ゼミ）、そして101を中心に、私は古河に出入りするようになった。

教室にまぶしく差し込む午前の陽光。
ガタガタッという轟音とともに滑り落ちる屋根の雪。
そのたびにドドッと揺れる108。
屋根から滴る雪どけ水の向こうに見える、気持ちの良い春の青空。
窓の外からもれ聞こえる通行者の談笑。

まるまると太ったスズメバチも参加したくなるような魅力的なゼミ。

彼／彼女が進むべき窓外へ延びる動線を、ゼミの参加者達はイメージしたはずだ。
うまくお引き取り願えなかった場合には、守衛さんからお借りした殺虫スプレーや雑巾、
ほうきで大立ち回りした。

外の景色が渋みを帯びる頃、古河の周りは落葉で満たされる。
「カサカサ」の奥に控えた弾力のある地面。
舗装された道ではなく、敢えてそっちを通して玄関に向かうこともあった。

決して優しいトーンではない「カンカンカン！」が108に響きわたる。
身体に響く金属音が窓外の寒気を思い起こさせるとともに、発言者に更なる声量アップ
を要求した。

1年を通してきしみ続ける床。
ところどころペコペコへこむ柔らかい廊下。
隣との距離が異常に近すぎる男子トイレ。

おそらく無数にあったはずの古河の風景の中に、まちがいなく私はいた。

2016年6月、私は無事に修了の日を迎えることができた。

博士論文の副査をお引き受け下さった瀬名波栄潤先生の拠点も古河だった。
今から20年近く前、私が学部生だった時に受講した「思索と人生」を担当されていた千
葉恵先生の研究室も、ここ古河だったことを後から知った。

これからこの古河で、雪の滑落音のなか勉強する人はいなくなる。
暖房がききすぎるために、真冬にもかかわらず窓を開け放つ人もいなくなる。
歴文はなくなり、古河からも人がいなくなる。

しかし、月並みな言い方だが、歴文・古河という結び目で引き合わされた縁は、この後
も消えることはないだろう。

この春も、来年の春も、その次の春も、古河の屋根からは、轟音とともに雪が滑り落ち
ていくはずだ。

想像の中で響く、滑り落ちる屋根の雪音は、私の心をうきうきさせる春の足音でもある。

学びの場、古河講堂

小田博志

ドイツのハイデルベルクで7年間過ごしている内に、夏の東京や四国の蒸し暑さが耐え難くなった。四国で生まれ育ったにも関わらず、私のからだは梅雨のない快適なドイツの夏になれてしまったようだ。「信州か北海道でなければ働けないな」と思うようになった。

だから北海道大学での就職の話は、願ってもないことだと喜んだのだった。2001年の3月末に来たとき、まだ雪が残り、空気は冷たいのに自転車を走らせる人がいたのに驚いた。最初に割り当てられた部屋は古河講堂105号室だった。その部屋はもと「複写室」だったそうで、古河講堂の研究室の中ではもっとも狭いようだが、当初は荷物も少なく不自由は感じなかった。

当時の歴史文化論講座には、教員として梶原景昭、宮武公夫、太田敬子、権錫永、村田勝幸の諸先生と井上昭洋助手がいた。その後、梶原先生が国土舘大学に移り、山下範久、廣部泉、桑山敬己先生が加わって、最盛期には8名の教員を擁する大所帯だった。

古河講堂とその前の中央ローンが織りなす四季折々の風景には魅了された。山桜が鮮やかな春。緑輝く夏。紅葉燃え立つ秋。そして白い冬。日が暮れてから、帰宅のために古河講堂を出ると、外は暗いはずなのに意外にも明るい。街灯や星明りが雪に反射して光っているのだ。雪が発光しているかのような幻想的な夜景に幾度心奪われだろう。

古河講堂は歴史文化論講座のゼミの場だった。もっとも忘れがたいのは学部の「文化人類学演習」の中から著書『エスノグラフィー入門』が形になっていったことだ。古河109という場において、学部2～4年の履修者、ときには大学院生、研究生、聴講生とのあいだで心に浮かんだ言葉を織り合わせた、いわばオーダーメイドの手づくり作品があの本だった。高い天井、机の配置、黒板、写真やスライドを見せるための大型ディスプレイ、そして熱心に参加してくれた学生の皆さん。その成果として形になったレポート、卒論、修論。決して忘れることはないだろう。夏には芝刈り機が、そして冬になると暖房設備が奏でた騒音交響曲と共に。

古河101に歴史文化論講座の学生研究室があり、コーヒーを淹れたり、ときにはギョウザを一緒に作ったりした日常の居場所だった。「卒論は団体戦」の名言が生れたのもこの部屋だ。

これに対して古河109は舞台だったかもしれない。ゼミや、論文の口述試験が行われたこの部屋ではみんなが主役だった。4月の新歓コンパと12月の卒論打ち上げの恒例の会場

でもあった。学生と、もしかしたら教員もまた年ごとに成長する姿を、古河講堂は見守ってくれていただろう。

古河講堂は人間のための建物だと思う。玄関やドアなど随所にあしらわれた「林」の文字。階段の手すりや踊り場に彫りこまれたシカの紋様。ゆとりと遊びのある建築。どの部屋も同じような規格化された現代の建築とは違った精神がその背後にあることがわかる。東北帝国大学農科大学林学教室から、北海道大学教養部、そして文学部と続いてきた入居者の中にいられたことを幸運に思う。

隣の104号室にいた廣部先生が異動されたとき、私はすぐに手をあげて引越をした。1.5倍は広くなったか。ヤドカリの如く、広い部屋に移り住んだわけだ。しかしその後、より狭い部屋に移ることになろうとはその頃は予想もしていなかったのだが。

この築110年の建物が底力を発揮したのは、昨年9月の北海道地震のときだった。早朝自宅で激しい揺れで目覚めたときに頭をよぎったのは研究室の本が散乱している絵であり、最悪「古河倒壊」の可能性だった。停電のため交通信号が消えた道路をおそるおそる車で走って、北大に向かった。つぶれてしまって、姿かたちが無くなっているかもしれないと思いながら近づいて行くと、古河講堂は、あった。その次の懸念は、自分の研究室の本が床に散乱している情景だった。こわごわ104号室の扉を開いた。ほとんど何も落ちていない。101号室も同様だった。古河講堂は私たちを守ってくれた。

歴史文化論講座は、歴史学と文化人類学の学際的な協同のために設立された。その自由な雰囲気は私には居心地がよかったし、古河講堂という建物ともマッチしていたと思う。その歴史文化論講座の歴史は、古河講堂からの転居と共に終わることになる。それは歴史文化論講座に込められた、自由な学際性の理念の終わりではないことを、ここに明記しておきたい。歴史文化論講座は、2019年4月から文化人類学研究室として再スタートするが、そこに集う人びとの自由な自発性が尊重される、風通し良く、居心地のいい場であることは引き継いでいきたい。

古河講堂で、あるいは古河講堂から私は歴史を深く見るということを学んだ。これも歴史文化論講座に属していたから意識するようになったはずだ。古河講堂はただ美しい文化財ではない。栃木県で明治時代に発生した日本で最初の公害、足尾銅山鉱毒事件。その原因企業である古河鉱業は、世論の厳しい批判をかわすために、帝国大学建設費として政府に巨額の資金を寄付した。その一部を使って建てられたから古河講堂と呼ばれる。これが完成したのと同じころ、鉱毒の被害を受けた谷中村は、水の下に沈められ、住民は棄民のように道東の佐呂間町栃木地区へと送られた。古河講堂の前に立ちながら、その人々のことにも思いがはせられるようになった。古河財閥が提供した資金が、今日の北大の礎となったことも忘れてはいけないと思う。

6体の頭骨が1995年に発見されたことに端を発する「古河人骨事件」は、日本の朝鮮半島やサハリンの植民地支配にまで歴史的な広がりのある出来事だった。その調査と返還に

携わった教員の皆様はご苦勞されたことと思うが、同時にこの件は大きい教訓となっただろう。この教訓を現在北大が直面しているアイヌ遺骨問題に活かせるかどうかが問われている。

不思議な縁ということをつくづく感じたのは、私が調査で通っているベルリンに、この古河講堂の近辺からかつて持ち去られたアイヌの遺骨があると判明したことだ（詳しくは『北方人文研究』11号の拙稿「骨から人へ」を参照）。約140年前にはこの辺りにまったく別の風景が広がっていた。美しい湧水から発する川が流れ、サケがさかのぼり、森が広がり、その中にコタンがあり、人々の暮らしがあった。その風景は、明治以後の植民地化の中で壊され、塗り替えられていった。その歴史の上に私たちはいる。この学びを得たのも、古河講堂にいる歳月の中でのことだった。

古河講堂は深くて多層的な学びの場だった。これからもこのかけがえのない学びの場を、北海道大学が表面的に飾り立てるのではなく、賢明に活かすことを願っている。

ヤドカリが大きい貝殻から小さい貝殻へと移るような断捨離荷造りを経て、私の研究室は文学部棟607に引越しをした。学生の居場所古河101は、文学部棟201になる。この引越プロジェクトを共に担ってくださった方々には心から感謝を申し上げる。そして私たちが長年見守ってくださった古河講堂に「ありがとう」の思いを捧げたい。この学びの場で培われた経験とつながりは、これからも私たちの糧となり続けるだろう。

私の古河ストーリー

2016年度 歴史文化論講座卒業生 K

「古河の民」という肩書は、いつしか「文学部の学生」と名乗るよりも、よほどしっくりとくるものになっていたように思います。

古河の扉を開き、守衛さんに挨拶をして、廊下を軋ませながら進んでいくと、大抵は顔見知りの姿がありました。「お疲れ様です」と挨拶を交わしながら研究室に入り、Hさんが寄付してくれたインスタントコーヒーを少々と(ごちそうさまでした)、大きなマグカップを持参してコーヒーを飲む、Mの沸かしたお湯の残りをもらって、ほっと一息つくのが私の習慣でした。そして、テーブルの真ん中にある、誰かのお土産のお菓子を少々つまみつつ、とりとめのない会話に花を咲かせたものでした。時には、詰まってしまったプリンターの修理を手伝ったり、手伝われたり(よく詰まるんだな、これが)。研究室の本棚を、ぼーっと眺めたり(図書館にも共通してある蔵書も多くありましたが、なぜか、課題のレポート等と関係なく心惹かれる本と出合うのは、古河の本棚が多かった記憶があります)。レポートや卒論が煮詰まっていたり、バイトに行くのが憂鬱だったり、うまくいかない人間関係にうんざりしているときでも、合唱団に所属していたMくんのハミングをBGMにして、古河でなんやかんやと過ごしているうちに、いつも気分が晴れてきたものでした。

このように、古河の居心地がよく、その逆に、本来文学部の牙城である文系棟には、あまり居場所がありませんでした(自分の所属する研究室がないのだから、当然のことではあります)。そのため、古河への親しみに少々の自虐を込めて、「古河の民」を愛用していたのだと思います。「民」という言葉の響きを、大いに気に入っていたというのも、もちろんあります。

元「古河の民」となって数年が経ちますが、在学中から歴史文化論講座の幕引きと、古河との別れが同時に迫っていることは、耳にしていました。そして、その最後への立ち会いが叶わないことを、寂しく思っていました。しかし、得難い居場所をくれた古河のあの一室が、我らが歴史文化論講座の研究室ではなくなっていく様を目にせず済んだのは、それはそれで幸福なことです。私も含め、代々の学徒を代表して、最後に立ち会って下さっている皆様には、心より感謝申し上げます。もしかすると、研究室の最後なんて貧乏くじを引いた、とお思いの方もいらっしゃるかもしれませんが、きっとどこかで帳尻合わせの幸運が来ることと思います。という訳で、何卒宜しくお願い致します。

また、今回このような素敵な企画を立ち上げて下さった、さよなら古河実行委員会の皆様にも、心より感謝致します。

最後になりましたが、「古河の民」並びに、古河記念講堂にゆかりの皆様方の、ますますのご多幸をお祈りしております。

古河エッセイ

酒井マナ

歴史文化論講座以外の友人から必ず言われたこと。

「えー、古河ってあそこ、人入れるの？しかも勉強できるの？」

この言葉を何度聞いたことだろう。

でも、それがまぎれもない事実なのである。

私には、古河講堂という場所でできた素敵な仲間と思い出があるのだ。

古河講堂を出れば、カラスの格好の溜まり場となっていた立派な木々の下を毎再びくびくしながら歩いていたこと。

授業の合間に文系棟や食堂に行くときは、少し急ぎ目で歩いたこと。

トイレのドアをスムーズに開けることは結局マスターできなかったこと。

帰る時は守衛さんの窓をなぜかチラッと見ること。

吉原さんの優しさと笑顔に癒やされていたこと。

先輩たちの卒論や修論、そしてみんなの勉強している姿を見て、何度も励まされたこと。

先輩や後輩たちとの束の間のおしゃべり。授業でのディスカッション。

オードブルを囲んだ歓迎会や卒論お疲れ様会。

古河講堂にはぎゅっとなつまっている。

ただお昼だけ食べに来た何気ない日常も、卒論を製本した特別な瞬間も。

そんな私にとって古河講堂で勉強したことは財産であり、自慢でもある。

「私、あの白い建物で勉強したんだよ。おしゃれでしょ。すごいでしょ。」

きっとこれから、私はこの言葉を何度も口にするのだろう。

古河よ、永遠なれ

瀬名波 栄潤

北海道大学文学部には1996年8月に着任しました。当時の文学部は人骨問題で揺れていて、僕には何が原因で議論が起こり、何を解決しようとしているのか、鬱々たる教授会で、全く理解できずにいました。わかったのは、古河講堂はその象徴であったということです。ですので、古河には決して良い印象を持ってはいませんでした。それから間もなく、学外向け北海道大学広報誌「リテラポプリ」の初代編集委員となり、コラム「北大再発見 (Campus Tour)」を担当しました。1999年2月号では古河講堂を扱いました。古河財閥の負の歴史を表す贖罪的建築物という切り口で、いい記事が書けたと思いました。が、正しくは「茨城」とすべき文部技官の出身地を「茨木」としてしまい、後日読者から指摘を受け赤面したのを覚えています。同号の表紙と記事ご覧ください。国の登録文化財としての基本的な情報は書かれていますが、当時の僕は自分が古河に住むなどとは想像もしていませんでしたので、データだけを集めた薄っぺらな内容でした。

2008年3月、文学部研究棟の耐震補強及び改修する工事が落成した際、間借りしていた当時の旧看護婦寮からそこに戻るのではなく、古河への引越を希望しました。漠然としてですが、古河の佇まいが好きになっていました。3名の先生方が古河への移動を希望し、それぞれが第一希望の研究室に配置され古河に迎えられました。不思議な一致でしたし、不思議な縁でした。僕は、附属図書館と中央ローンが臨める、2階の北東向きの角部屋をいただきました。4メートルほどの高い天井の壁には、3メートル9段の特注本棚を設置してもらい、窓には取り外しのできる特注の木製防虫網戸を作成、そして、クーラーがなかったため、シーリングファンを天井の中央に取り付けてもらいました。贅沢な要求でしたが、古河の雰囲気には最高に似合いました。リモコンで風量や風向きを上下に調整できたので、実用的でもありました。以降、「古河愛」が確実に強く育まれることになりました。

古河での生活は実に幸福でした。引っ越してすぐに振り子のついた小さな壁時計を購入しましたが、なぜかすぐに壊れてしまい、針が進まなくなりました。実は、これは古河からのプレゼントだったのです。古河では時が止まるのです。1909年以降、先代の研究者達が蓄積してきたエネルギーが建物に染み込んでいるからでしょうか。勉強をされていて気がつく、朝になっていたことも何度かありました。東の空がしらじらと明るくなるにつれて、鳥の群れが研究室の側の大木に集まり、しばらく互いにさえずり合い、どこかへ飛び

去って行きます。すると、別の種類の鳥が、待っていたかのように飛んで来て、朝の挨拶を始めるのです。これが、数種類の鳥によって繰り返されました。ある朝は、北大乗馬部員が馬に乗って古河前を散策している姿を見かけました。タイムスリップしたのではないかと思いました。日中は、学内で遊ぶ園児の楽しげな声、観光客らが記念撮影をするときの静かな眼差し、学生たちの往来、そして夕刻になると木に集まるカラスの鳴き声まで、古河は大学のあらゆる姿を見つめ聞いてきました。一日の変化だけでなく、あらゆる天気や季節も、古河の窓は写し出しました。時折建物内に現れるススメバチやカメムシは闖入者というよりも、古河の先住者のような気がしました。僕は、古河講堂とそこの窓から見える北大の姿が大好きになりました。そして2009年、古河講堂竣工100年記念のイベントを大学執行部に提案しました。が、大学の関心の低さと僕の力足らずで実現には至りませんでした。今回、学生の皆さんを中心に「さよなら古河」セレモニーを実現してくださったことに、古河講堂は大変喜んでいと思いますし、僕も心から感謝致します。

今後、僕は文学部研究棟に戻り、そこで研究教育職を終えることとなります。しかしながら、僕の北大への思い出は古河とともにあり続けるのだと思います。そして、いつの日か北大を退職して来訪するときには、古河講堂を見て、かつての自らの存在を確認するのだと思います。古河よ、永遠なれ。

表紙 (<https://www.hokudai.ac.jp/bureau/populi/edition02/index.html>)

記事 (<https://www.hokudai.ac.jp/bureau/populi/edition02/index.html>)

添え書き

歴史文化論講座 4年 玉置 志乃

実のことを言うと、古河講堂に全然思い入れなんかないんです。4年生になったら私も通うようになるのかなあ、なんて思っているうちに時は過ぎ、気づけば卒業も間近に迫るところになって、私はこの文章をようやく書き始めています。

古河講堂は、私が初めて足を踏み入れたときにはすっかりおんぼろで、人が歩くたび廊下はぎしぎし言うし、扉は歪んできていてすんなりとは開かないし、冬場に授業をしていると暖房の鉄パイプががんと不規則にやかましい音を立てていました。耐久性の問題で建物を使えなくなると聞かされたときも、私は悲しむより先に、心のどこかで納得していたのです。京都のお寺やなんかを見ても感動しない私には、こういう古い建物に何の価値があるのか、実感として理解することができずにいました。

ただ、私は少なくとも3年間、縁あって古河講堂に立ち入る権利を得ていました。講座の先生方が、それぞれの部屋で本に囲まれて過ごしていらしたのも、卒業論文を書くために4年生が集まっていたのも知っています。私が北海道大学に入学する前にもそういう人たちがいて、そこで学術的な議論がなされたり、雑談をしたりしていたのかもかもしれません。いったい何人がこの建物で過ごしたのか、私はぼんやりとでも想像してみます。誰かが廊下を歩くたび、教室で椅子に座るたび、新しい本が棚に置かれるたび、古河講堂の床は少しずつたわんでいきます。それは目に見えないほどわずかなもので、当然すぐ元に戻ってしまうのですが、しだいに蓄積された重みのために、古河講堂は建造当初からずいぶんたわんでしまったはずです。ほこりをかぶってどンドンと堆積していく本みたいに、そこには古河講堂を利用してきた人たちの重みがあるというわけなんです。

もうじき古河講堂は使用されなくなり、3月になって最後の掃除が進められています。たくさんの本が運び出されて身軽になった古河講堂は、久しぶりにくたびれた身体を休めることができるかもしれません。それでも長い年月を経てできた床のたわみはそのままで。人が建物で過ごすというのはそういうことだと思うのです。最後に、古河講堂で過ごした皆さんと、その空間を作り上げてくれたすべてのものに感謝します。

古河記念講堂の思い出

歴史文化論講座 博士課程 福島令佳

子どものころ、大きな画板を肩から掛けて、北海道大学構内を歩き回った。写生会では、どの建物を選んでも自由。白い外壁と周りの緑が気に入って、木陰に腰を下ろし、せっせと描いた記憶がある。大人になって、その建物で学ぶことになるとは。きしむ床、引き上げ式の窓、暖房の大合奏、木のおい。“生きている”建物で学べたことは、コンクリートの中で勤務する毎日の中で、楽しい時間だった。古河記念講堂は、学び舎としての幕を閉じるが、ここで、学んだ者たちは、この楽しさを選んだり、増やしたりしていくと思う。柱に手を添えて御礼を述べたい。

突撃！ 隣の守衛さん

—古河を見守る男たちのライフヒストリー—

歴史文化論講座学部4年 松本朋華・森絢楓・山口鈴香

1 はじめに（山口鈴香）

古河に歴史あり、そして「守衛さん」に歴史あり——

施設の警備というハード面・優しい見守りというソフト面の両面から、古河講堂とその住民を支えてくださった守衛さん。本稿では、現在古河講堂で勤務されている林さん・奥野さん・吉田さんの三人を主役にお迎えして、知られざる古河講堂の秘密、みなさんのライフヒストリー、そして人生の先輩からのアドバイスまで！ 多岐にわたってゆるくお送りします。肩の力を抜いてどうぞお楽しみください！

実は、お三方の正式な役職名は「警務員」なのです！ ですが、古河住人はこれまで「守衛さん」として親しんできたので、ここでもそう呼びすることにします。

2 守衛 24 時—古河で過ごす一日（森絢楓）

平日の勤務スケジュール

古河講堂一階、二階、ポプラ館を巡回。6分おきに次の巡回ポイントへ！	8:30	出勤・交代	警備日誌の記入、観光客対応などの仕事をこなしつつ、趣味や勉強の時間を楽しむ。
	15:00	巡回①	
	19:00	巡回②	
	22:00	巡回③	
ついたての奥で仮眠。	5:00頃	起床 その後掃除など	
	6:00	巡回④	

守衛室の内装…キッチンやテレビなどがあり、音楽好きの奥野さんは自前のスピーカーをセッティングしていた。キッチンを利用するときは匂いに気をつけていると語る吉田さん。しかし、焼き魚のおいしい匂いを小田博志先生はしっかりキャッチしていた…！



写真1 奥野さんのアンプ。小さいのに低音もしっかり聞こえるのが特徴（2019年3月17日 松本朋華撮影）。

警備日誌…連絡事項や最後の利用者の帰宅時間などを記録する。その際、守衛室前のノートの記名によって現在の古河利用者を確認するとのことだが、吉田さんは勤務当初、あまりに「達筆」な利用者の記名が読めない人こともあったそうだ。「芸能界のサインじゃないんだよ（笑）」

観光客対応…北大の観光マップを常備。観光客の雨宿りを受け入れることも。学生時代ESSに所属していた吉田さんは、古河を訪れる海外からの観光客と英語で話せたのが嬉しかったという。



写真2 守衛室に常備されている北大ガイドブック(2019年3月17日 松本朋華撮影)。

3 趣味も仕事も超一流・林雅信さん(山口鈴香)



写真3 守衛室で記念写真その1。左から林雅信さん、松本朋華、山口鈴香（2019年3月16日 山口鈴香撮影）。

林雅信さん

古河勤務歴5年で、守衛さんの中では一番のベテラン。旭川の高校を卒業後、電器屋でのお仕事を経て現在に至る。趣味は「歌うこと」。来年度からは経済学部で勤務。

「サービス業」としての「警備」

「鍵の貸し借りだけなら誰でもできる。この仕事の本質はサービス業だと思っています。私はこの仕事に本当に誇りを持っています」と、林さん。日々の業務の中では、大学関係者だけではなく、観光客と関わる機会もあるそうだ。観光客との関わりの中では、時に「マニュアル」と「人道」のはざままで葛藤することもあったが、そのような業務外ともいえる人々との関わりが「自分の中でメモリーとしてあります。古河での業務は本当に充実していました」と笑顔で語った。そのような林さんの姿勢が、「鍵の貸し借り」にとどまらない、ホスピタリティにあふれた「サービス業としての警備」を可能にしているのだろうと感じた。

また、林さんにとって古河は「学びの場」であったそうだ。「北大の学生さんたちと同じく、たくさん学ばせていただきました」と語った。



写真4 守衛室で記念写真その2。まるでステキな家族写真?! (2019年3月16日 山口鈴香撮影)

震災と古河講堂—トースターの第二の人生?!

2018年9月6日午前3時7分、林さんは古河講堂での勤務中にあの震災を経験した。地震の後、ブラックアウトを経て、空が白み始めたころ最初に古河にやってきたのは小田先生だったという。筆者(山口)は「アルマゲドン」の名シーンを想像して胸が熱くなった。

古河講堂における物的損害は、研究室の電子レンジの上に置かれていたトースターが落ちて壊れた、それだけだという。トースターは、捨てられていたところを林さんに拾われ、電器屋さんでの勤務経験を経て培われたスキルで修理された。少しいびつな形になりながらも、今でも林さんの家で元気にパンを焼き続けているそうだ。

ワーク・ライフ・バランス—趣味があって仕事がある

林さんの50年来の趣味は「歌うこと」。佳山明夫の「こころの翼」という曲で、札幌で1位になったこともある。現在、林さんのオリジナル盤を製作する計画もあり、そのために仕事を頑張っているという。

「歌のない世界は考えられない」と、林さん。歌という趣味を通して生まれた人との繋がりは本当に大切であり、家と職場の往復だけでは気が滅入っていただろうと語った。それに加えて存在する、趣味の場という「サードプレイス」が自身を支えているという。来年から社会人として働く筆者（山口）には、仕事をしながら充実した余暇を過ごす林さんの様子がとても輝いて見えた。「古いも若きも平等なのは死に向かって一直線であり、生かされていることの充実感を大切に生きていくべし」と語る林さん。そのように自分の軸をしっかり持つことが、理想的なワーク・ライフ・バランスを実現させているのではないかと感じた。

人生の先輩から一言！

人生、自分の思った通りにやってください。信頼できる人のアドバイスは大いに聞くべき。でもこのIT時代、発言の裏付けはしっかりとること。誰でも落ち込むときはあるから、そんなときに友達が大事になる。信念と覚悟と希望をもって、強い意志で頑張ってください。

4 唯一無二のドラマー・奥野信一さん（松本朋華）



写真 5 守衛室で記念写真。左から奥野信一さん、森絢楓、手前が松本朋華（2019年3月17日 小田博志先生撮影）。

奥野信一さん

吉田さんと同じく林さんの紹介で、2018年4月から勤務。出身は麻生。一度は大学に進学したが、どうしても音楽の道に進みたいという強い思いから、周囲の反対を押し切って退学し、ドラマーに。その後新聞配達の仕事を経て、2011年にドラムを再開。来年度からは図書館で勤務。

奥野さんと古河講堂

某日昼。3人目の守衛さんに突撃インタビューすべく受付へ向かうと、顔を上げた奥野さんと目が合った。我々が何をしに来たのか、全てお見通しのようなのである。奥野さんは我々を快く守衛室に迎え入れ、コーヒーを淹れながらそのわけを話してくれた。「林さんと吉田さんと私の3人で、『古河だより』というLINEグループをやっているんです。私が作ったんですけど。いいことがあったら、すぐに共有したいですから。」守衛の皆さんは通常の警備日誌のやり取りだけでなく、共通の趣味である音楽をはじめ、様々な部分で普段から付き合いがあるそうだ。「たまにいたずらをしかけるんです。朝

8時ちょっと前に音楽をかけておくと、勤務の交代でやってきた吉田さんは歌が大好きですから、すぐに歌い始めるんです。」一人で24時間という勤務体制から、黙々と業務をこなす姿を想像していた筆者には意外なエピソードであった。奥野さんの話の端々からは、古河での勤務時間を楽しみながら有効活用していることが感じられた。6分毎の巡回では、頭の中で音楽を鳴らし、テンポを取りながら歩いているのだという。また、隙間の時間は勉強に充て、健康や音楽についての知識を深めているそうだ。

奥野さんとドラム

奥野さんの人生において、重要な位置を占めているのが音楽だ。当時周囲でバンドというものを知っている人がいない中、大学を中退してドラマーの道に進んだ。様々なバンドで経験を積みながら、自分のバンドも持ち、札幌中のナイトクラブを回ってドラムを演奏した。演歌歌手の細川たかしのバックバンドを務め、デビューまで支えたこともあったという。これらの経験から、今ではどんなジャンルの音楽でも演奏できるようになった。一度は活動をやめ、新聞社に務めた時も、自分の感覚を磨くために音楽を聴きながら新聞配達をこなし、音楽から完全に離れることはなかった。音楽やドラムの話を生き生きと語る奥野さんの姿からは、音楽が本当に好きだということが伝わってきて、今でも強く印象に残っている。筆者自身も音楽経験があり、奥野さんが経験の中から得た「Qポイント」「時間軸」という独自の音楽理論の説明はとても興味深かった。普段は「守衛さんと学生」という立場のつながりしかなかったが、(プロの方に対して恐縮だが)音楽が好きだという共通点を通して関係性が広がったのは嬉しかった。

こぼれ話

「この話はぜひメモしておいてほしい」とニコニコ笑いながら語る奥野さん。「林さん、家にカラオケマシン持ってるんです。それくらいカラオケ好きなんですけど、あるとき『カラオケ取りますか？家族取りますか？』と聞いたら『カラオケ取ります』って即答して、家族がね…(笑)ってはなしがあるくらい。」でも、インタビューを通して、林さんはもちろん、奥野さんも吉田さんも、本当に音楽が大好きだということが伝わってきましたよ！

人生の先輩から一言！

何事も全て基礎が大事。どんな職業でも。基本を大切に。

5 昭和スター歌手の立役者・吉田利美さん（森絢楓）



写真6 守衛室前で記念写真。左から小田博志先生、森絢楓、吉田利美さん、松本朋華、手前が山口鈴香（2019年3月15日 山口鈴香撮影）。

吉田利美さん

2018年4月から勤務。旭川市出身。進学と同時に上京。卒業後、新宿コマ劇場で付き人兼舞台監督兼演出を担当。その後来札し、現在に至る。趣味は1人カラオケ（演歌）。

古河での24時間勤務—ホラーサスペンスの世界

「はじめは古河の魅力を感じたし、ここで勤務できるのは感無量だったけど、実際やってみたら24時間勤務が体につらかった」と語る吉田さん。なかなか守衛室で眠りにつけない彼にとってこの勤務は「長い長い24時間」であったようだ。

特に夜勤についての語りからは、昼の姿しか知らない私たちには想像できない「真夜中の不気味な古河」の姿が浮かび上がってきた。勤務を始めた当初を振り返った吉田さんは「夜に音がするから人が住んでいるかと思った」と語り、特に「(古河は)階段と廊下のたたずまいがいいけど、夜は土曜サスペンスの世界」に見えるそう。巡回でポプラ館へ行く際「(巡回コースの木の)枝、葉っぱかと思ったらカラスだった(笑)」と語るように、夜、カラスの大群が木に止まっている様子は薄気味悪かったに違いない。ただ、古河に隠し部屋はなく、あると噂されていた地下室には電気が通されているだけのこと。

「夜勤中、心霊体験はしなかったか」という私たちの質問に応え、「お化けが出ることはなかったけどね…」と語りだした吉田さん。なんでも、夜中、守衛室にあるテレビが誰も触っていないのに勝手に点いたというのだ。「やっぱり夜の古河には何かあるのだ！」と盛り上がり、期待に満ちた私たちの表情をひとしきり楽しんだ吉田さんは「実は、林さんがテレビ番組の視聴予約をされていて、自動でテレビが動いただけだった！」と種明かし。「何で林さんこんな時間に予約するのかねえ(笑)」。

華の昭和歌謡曲全盛期—スターを支えた新宿コマ劇場時代

演歌が大好きな吉田さん。奥野さん曰く、勤務交代のときに奥野さんが演歌のイントロをスピーカーから流すと、吉田さんが歌いながら守衛室まで入ってくるそうだ。そんな吉田さんは大学卒業後、「演歌の殿堂」として愛された新宿コマ劇場で社会人生活をスタートさせた。舞台監督や演出のみならず、演者の付き人として幅広く活躍した吉田さんは、多くの昭和のスター歌手との逸話を披露した。

「歌謡界の女王」美空ひばりさんについて、「いつもあんたって呼ばれてた。名前を呼ばないでね。ひばりさんと一緒に仕事するようになって初めてストレスとか胃が痛いとかを知った(笑)」と語り、ドライアイスの煙を流すタイミングなどで苦勞したそうだ。また、サブちゃんこと北島三郎については、「(北島三郎は)自分で演出するから、(演出担当の吉田さんは)バカバカ言われていた(笑)」と、スターと共に舞台を作り上げてきたエピソードを明かした。これらの華やかで懐かしい逸話の数々は、私たちを一気に劇場の世界へ連れて行ってくれた。

人生の先輩から一言！

どんな人に対しても挨拶が大事。挨拶を返してくれない人にも挨拶し続けたら必ず実る！ 守衛室前を通る教員や学生からの挨拶について、「挨拶嬉しいで～」と満面の笑みを見せた吉田さん。

おわりに (松本朋華)

いかがでしたか？ いつも窓越しに会話するばかりだった奥野さん、林さん、吉田さん。「勉強お疲れ様」「気を付けてかえってくださいね」と声をかけてくださるほほ笑みの裏には、三者三様の歴史があり、人生経験があったのですね。そして、守衛さんというお仕事を通して得た経験から、我々が知らなかった古河講堂の新たな一面を教えてくださいました。この記事が皆さんの目に触れることで、古河の新たな歴史の一部となれば幸いです。文字通りの突撃インタビューに快く答えてくださった皆さん、本当にありがとうございました！

編集後記

まず、最後の最後までギリギリ人間だった私を温かく見守ってくれたあやかちゃん、すずかちゃん、本当にありがとう！ 大好きな古河で、お世話になった奥野さん、林さん、吉田さん、そして同期のふたりと最後のエスノグラフィーを作り上げることができて、本当に感慨深い思いです。

また、実行委員会に誘ってくださった小田先生、文集を作成してくださった石原さんのおかげで、貴重な体験をすることができました。このように人と人とのつながりを与えてくれる古河講堂は、私にとってかけがえのない場所であり、楽しい時もつらい時も帰ってこられる居場所でもありました。だからこそ、古河にいられるのはこれが最後なのだという現実が胸に突き刺さります。この場で関わってきた人、モノ、コト全てに思いを馳せながら、皆様の新しい生活もまた豊かであるように願って筆を置きます。

松本朋華

いつも温かい言葉をかけ、私たちの研究や健康を気遣ってくださった守衛さんと初めてゆっくりお話しする機会をいただくことができうれしかったです。せっかくお近づきになれたのに、皆古河を去らなくてはならないのは本当に寂しい…。

本稿は、いつも私たちを見守ってくれた古河講堂で行った最初で最後の古河エスノグラフィーであり、3年間共に人類学を学んできたかけがえのない同期との最初で最後の共同エスノグラフィーでした。これが私が歴史文化論講座生として最後に書き上げたものとなったのは感慨深いです。

勤務時間中に突撃インタビューを快く受けてくださった林雅信さん、奥野信一さん、吉田利美さん、「守衛さんにインタビューして古河エスノグラフィーを残すと面白いのでは」とアイデアをくださった小田博志先生、二つ返事でこの企画に参加してくれた松本朋華さんと山口鈴香さん、「私たちの古河ストーリー」を取りまとめてくださった石原真衣さん、本当にありがとうございました。この場をお借りして心からお礼申し上げます。

森絢楓

今回初めて共同エスノグラフィーを執筆しましたが、三人で協力する中でどんどん原稿がブラッシュアップされていく過程に感動しました。三年間小田ゼミを共にしてきたあやかさん・ともかさんと最後に素敵な企画を作ることができ、とても嬉しく思います！

また、守衛さん方とはじめてゆっくりお話しする機会が得られたことは幸せでした。「三人の守衛さん」が、「奥野さん」「林さん」「吉田さん」というずっとした歴史を持った方々として感じられるようになりました。

古河講堂で過ごした時間と、そこで生まれたつながりは、自分にとって大学生活の大きな財産になりました。改めまして皆さまありがとうございました。

山口鈴香

私たちの古河ストーリー

発行日 2019年3月25日

編者 石原真衣

発行所 北海道大学文学部 歴史文化論講座

©2019 Department of History and Anthropology